研究会記録

◇第23回杏林大学第2外科学教室例会
［平成7年12月23日（土）10時〜15時、杏林大学医学部附属病院例会堂］

1. 再建に浅下腹壁静脈を再建吻合した乳癌術後乳癌の一例
　伊坂 泰嗣

症例は45歳女性、10年前に乳癌術を受け、その後乳癌再発を契機として、表術も腫瘍を触知したため、当科を受診した。

再建、MRIにて左乳房A領域に直径約3cmの腫瘍と臓窩リンパ節腫脹を認め、T2N2、M0、Stage IIとし、非限定型乳癌切除術と乳癌再建術を一連的に行った。乳房再建術には下腹部横筋皮弁を用い、さらに左浅下腹壁静脈と左胸背靜脈の血管吻合を行った。

乳癌再建の合併症として感染、皮弁壊死等があり、血管吻合は合併症の発生頻度を低下させたと考えられている。今年当科ではこのような手術は7例あり、その内5例に皮弁の部分壊死もしくは部分変色が認められたが、どの症例も比較的小さな範囲とどまており、血管吻合の有用性は高いと思われる。今後、益々この様な術式が必要とされること。

2. 乳腺原発悪性リンパ腫の一例
　田中 良太

乳腺原発悪性リンパ腫は稀な疾患で、乳腺恶性腫瘍の0.04〜0.5％を占め、本邦では138例を認める。今回、82歳と高齢で最大腫瘍径2cmと小病変にて手術した乳腺原発悪性リンパ腫を経験したので報告する。症例は82歳、女性。平成7年1月右乳房腫瘍を自覚し、2月9日当院を受診。2月14日当科紹介された。右乳房D領域に2.0×1.8cmの腫瘍を触知した。マンモグラフィーでは、境界明瞭、濃度の高い腫瘍像を認め、エコーで内部エコーは低輝度に描出された。吸引細胞診では異型を伴うリンパ球様細胞を認め悪性リンパ腫が疑われた。同年4月26日、非限定型乳房切除術を施行した。組織学的には、大型のリンパ球様細胞が、乳癌組織にびまん性。好酸性に浸潤し、免疫染色では、LCA(+)、L-26(+)(+)であり、malignant lymphoma diffuse、large cell type(1SG)、B-cell typeと診断した。

3. 下部消化管穿孔症例の検討
　平山 隆

下部消化管穿孔について当科が経験した過去9年間（87.1/1〜95.11/30）の症例について検討した。緊急手術を施行した下部消化管穿孔は67例で全緊急開腹術642例に占める割合は10.4％であった。そのうち外傷性穿孔7例、非外傷性穿孔が58例であった。非外傷性穿孔では急性消化管穿孔を除くと悪性穿孔が14例（20.9％）を占めS状結腸穿孔が7例（50.0％）と1番多かった。遊離ガスを認められたのは22.4％と低かった。術前白血球数では4000以下の症例が5例外入院中死亡が20％で1番多かった。発症から手術までの時間と病気部位との関係では大腸が時間的に長かった。

考察：術前白血球数が4000以下の症例では後療はやくそのことを踏まえ治療にあたるべきである。

4. 診断に難かした19歳、粘表皮癌の1例
　藤田 敬

今回我々は比較的稀な左上肺支原発のmucocutaneous carcinomato sarcomaを経験したので報告する。症例は19歳男性、10年前より肺異常陰影を指摘され今回、発熱、咳痰、血痰を主訴に来院した。気管支鏡で左上幹を完全閉塞する腫瘍が認められた。生検及び細胞診で表皮が良性であった。確定診断及び治療の決定のため、気管支鏡的腫瘍切除術を施行。腫瘍深部で粘表皮癌が認められ、左上葉切除+気管支形成術を施行した。本疾患の診断は気管支鏡下生検によりなされ得るが、本例ならびに術前診断されたものは90症例中14例（約15.6％）にすぎない。診断困難の原因として、①組織学的に特に多彩な所見を呈する。②毛細血管に富み易出血性であるため、生検が困難である。③腫瘍自体が気管支粘膜に覆われているため、洗浄や線維細胞診で悪性細胞が検出されにくい。などが考えられる。

5. 悪性縦隔腫瘍の検討
　大滝 弘毅

研究目的：当科における縦隔腫瘍中、悪性例における術前生検の正診数を調べ、これらのデータから恶性例に対し適切な治療が行われているかどうかを検討した。

対象：1993年5月から1995年11月までの縦隔腫瘤18例について検討した。